

幼児と音楽

清水 光子



はじめに

「幼児と音楽」という、私にとってはおじめての題をいただいて大へん戸まどいを感じただけれど、幼児教育の現場にある人なら誰しもそうだろうと思うが、音楽についての関心はごく深いわけだし、とにかく私は音楽が好きである。そこで、日ごろ幼児の、幼時の音楽について考えていることをあれこれ、多分、取りとめのないことになりそうだけれど、書いてみて、読んでくださる方々にお教えを願いたいと思う。したがって、これはこうなのだ、というのではなく、一日のほとんども幼児とともに過ごしている中で、私はこう思っているのだがどうだろうという一つの提案みたいなものをしてようと思うのである。

そこで、少しペダンティックで面はゆいけれど、カントの三つの提言、(一)自分は何を知っているか。(二)何を望むことができるか。(三)何をなすべきか。を幼児の音楽に関連させて進めてみることにしようと思う。

(一)

自分は幼児と音楽について果たして何を知っているだろうか、幼児にとって音楽とは何だろうと問いかえしてみる。音

楽の要素はメロディ、リズム、ハーモニーであるとか、幼児に適した音域はどういう範囲だとか、音楽教育はどんな順序で行なうべきだとかいうことは、ごく浅い上っ面の知識としか思えない。幼児の一人一人があつた曲を、このリズムを、どう受けとめているか、ふだん、身近な音楽をどう感じとつて

いるのかを私はあまりにも知らないことに今更驚くのである。最近、明治神宮に園外保育をしたら、お祭のはやしの練習を仮舞台でしていたところに通りかかった。こどもたちは思わずその前に足を止めてききほれていた。また、ある月のお誕生会をしたとき、ホール（遊戯室）にシューベルトのま

すの曲を流しておいたところ、そこへ入ったとき、ほとんどの子どもがすーっと静かに席についたのであつた。また、何か大へんうれしいことがある。「ワイイ、ワイイ」と声をはりあげ、手をたたき、とび上がる。ようやく立つて歩くようになった子が、テレビやラジオでリズムミカルな曲がきこえてくると体をうごかして調子をあわせる。これらのことは皆、幼児が音楽を音楽として受けとめ、自発的な活動や表現として創造しているのではないだろうか。ともかく、こどもは音楽が、うたが好きで心にも音楽をもっているのだということだけ、私は知っているように思う。ベートーベンの音楽ノートに、ミュルナーよりのかきぬきとして、

「生命は音の振動に似ている。そして人間は絃楽器だ。地面にひどく落とせばほんとうの響きは失われてしまう。そしてもう二度ともと通りには響かない」

とある。人間の子どもがごく純粋な、精巧な、そして敏感な絃楽器だというように思いがする。幼児は心の中に音楽を住まわせている。そして生活に音楽を生かしている。幼児にとって音楽は楽しいもので、楽しくうたい、ひき、聞き、更に創る。しかも音楽によって安定し、心の解放をし、自由になる。教育要領の領域音楽リズムのねらいに「のびのびと、楽しむ」ということばが何度も出てくるのはこうしたことではないかと思う。

(二)

そこで次に、幼児と音楽に関して何を望むことができるだろうか。大へん簡単な言い方であるけれど、音楽という字のとおり、楽しいものと受けとめるようにまず望むことができると思う、楽しくうたい、ひき、聞き、表現すること、創造することである。そして更に心に感じて喜び、子どもながらに慰められ、安らぎ、あるいは解放感や自由感をもつこと。自分のことで恐縮だけれど、ほぼ六十年近い昔の私の幼児時代を思い出してみる。蓄音機はあつたけれどテレビはもちろ

ん、ラジオもなかったが、生活の中にむしろ今よりもっと身近く音楽があったように思う。原っぱの向うのまっかな夕焼けに向かつて、大声で「夕やけ小やけ、あした天気になあれ」と心をこめて叫んだ。「ここはこの細道」などのわらべうたあそび、まりつきうた、お手玉をするのに意味もわからず川中島合戦のうたをうたっていた。また、そのころはじめて作られた童謡のあれこれでどんなに幼い心がふくらんだことだろう。それを思うと、幼児と音楽に関連して何を望むことができるかがわかってくるような気がするのだが、どうだろう。

(三)

前のことから次の幼児と音楽について、何をなすべきかが自ら道がついてくるように思うけれど、逆に何をしてはいけないかと裏返して考えてみる。まず、幼児が音楽をきらいにしてはいけないと思う。そうすることは音楽ではないことではないだろうか、私たちはしばしば好きにしようとして、反対にきらいにしていることが音楽に限らずあるようで、それは幼児の自発性を尊重しないからなのではないか。形式を重んじ、知識をおしつけ、出きばえを尊ぶことが過重になってしまふと、子どもの心に抵抗感ができてせつかく自由な豊か

な喜びにあふれた心がしぼんでしまふ。もつと年齢が大きくなって訓練や知識の重みに耐えうる精神発達の状態になっていればまだしもだけれど、それでもなお、私は無理強いはいえたいと思う。かと言って何の指導もなく放ったらかしではないのでは決してないの言うまでもないので、より楽しくうたうには無理にやたらに声をはりあげない方がいいし、美しいハーモニーを奏しむには勝手な音や声を出しては駄目である。自分ひとりでなく、友だちと一緒にきくにはどうするよりも楽しくきけるかの指導もあつて当然である。

もう一つ忘れてならないことは、幼児の生活の中に音楽を生かすことだと思ふ。これは誤解れさやすいが、よく幼稚園で生活のうたというのをうたったり、きかせたりする。おはようのうた、お片付けのうた、手洗いのうた、帰りのうた、というように。これがわるいというのではないが、私のいう生活の中に生きる音楽とはそれとは意味がちがうのである。生活の中、言いかえれば遊びの中に音楽を生きさせ、音楽によつて生活、遊びが更に生きるといふことである。花壇にチューリップがたくさん咲いた、思はずチューリップのうたが出てくる。珍しい位の大粒の雨が降ってきた。「雨が雨がふっている」とうたい出す。積木を打ちあわせたらとてもいい音がすることを発見して、リズムカルにたたいてみ、タンバ

リンや鈴などと一緒に知っているうたにあわせてたいて遊ぶなど、限りなく機会があると思う。そのような意味では生活の中に音楽を生かすというより、生活の中にある音楽を大切にして育てるようにすることが大切ではないか。何も殊更に音楽の時間をとって教えないでも、幼児にとって音楽とは何だろうかを考えると、幼児が自分で自分の心の中に生きている音楽を育て、創造するようになるにはどうすればよいか、どうしてはいけなかがわかるように思う。

更にくどいようであるけれど、幼児一人一人が異なった個性をもっているので、決してどの子どももおなじな振動数をもっているのではないことに心をとめねばならない。芸術的表現にしても絵画的要素が多い子どももあれば、言語的詩的要素、身体表現的要素に富むというように、その子ども一人一人についての歴史や環境によってもっている個性がある。それを一律に扱うことに大きな疑問をもつのである。だからといって、かなで得る音楽がどうあろうからといって、その生命が敏感な絃楽器に似ていることにかわりはないと思う。

おわりに

おわりに大へん抽象的な話になってしまったようだけれど、それをそのままつづけてむすびたい。

現場の幼児教育に携わるものとして、今どうすることが本当なのか。私は生命の絃楽器を地に落としてこわさないように大切にみがきつづけること、それがよりすばらしい音色で奏でられるようにすることはなかるうか。その方法はさまざまあるだろう。オルフ、コダーイシステム、リトミックなどなど。けれど子どものそれぞれの、その時々々の弦の振動数にいつも共鳴しうるようにこちらの振動数も固定させないでいる用意が大切なのではないか。精巧な、江崎ダイオード級の画期的な何かが心の中にいつも用意れさせていけばよいのだけれど……。それには私自身絶えざる努力が必要ではないだろうか。

最後に再びベートーベンの音楽ノートからのことばを引用すると、

「この世でなすべきことはたくさんある。すぐになせ！」

(文京区音羽幼稚園)